私の履歴書

釜本邦茂

③

人生変えた言葉

「いろんな国にいける」

野球少年一転 サッカー部へ

太秦小学校に上がるまでは近所の広隆寺（京都市右京区）の境内が遊び場だった。べったん、鬼ごっこ、夏は保津川で水遊び。子供が伸び伸び体を動かせる時代だった。

家から遊び場まで最短距離で行こうと、途中の家という家の塀や垣根を乗り越えたりした。太秦の東映撮影所にも忍び込んだ。チャンバラごっこには絶好の場所だった。そういう悪さも含めて遊びのすべてがサッカーに役立った気がする。

例えば、塀一つ越えるにも「ホンマに飛び降りて大丈夫か」と判断を迫られる。川に行けば跳んでも渡れそうにない川幅の場所に上級生に連れていかれる。一歩間違えばとんでもないことになるが、そうやって跳んだりはねたり転んだりしながら、いろんな機能や感覚を全方位的に発達させていったように思う。

部活動で長兄の幸和はテニス、次兄欣晃は卓球、姉の美佐子はバスケットボールに打ち込んだ。スポーツ一家の中で最初に私が夢中になったのは三角ベースの野球。校庭の砂場で相撲もよく取った。内掛けの名人、大関琴ケ浜がひいきの力士だった。

サッカーは校技なほど盛んだったが、本格的に始めたのは小学4年の冬から。上級生になるまでさせてもらえなかったのだ。人がごちゃごちゃボールに群がって目立てないから当初は好きになれず、「ゴール前で待ってるから速く俺にボールを寄越せ」と横着な催促を仲間にしていた。

クラス対抗戦で縦パスを追いかけて点を取る、足の速い私に目をつけた先生がいた。姉の担任だった池田璋也先生だ。教職員で構成する京都紫光クラブ（Jリーグ京都パープルサンガの前身）の現役選手でもあった。卒業寸前の3月末、その先生の言葉を母親を介して聞かされた。

「野球をやってもせいぜい行けてアメリカくらい。サッカーは世界中のどこでもやってるし、オリンピックにも出られるかもしれへん」

中学では野球部に入るつもりだった私は「いろんな国にいける」と聞いて心変わりした。うちの家族は姉の美佐子まで中国の海拉爾（ハイラル）で暮らした。両親がその頃の話に花を咲かせると自分だけ仲間に入れない。そういうことも「いつか自分も外国に行く」という願望を育てたように思う。

中学の修学旅行での筆者（中央）。急激に身長が伸びた

後々、池田先生は「人の進路を変えてしまう教育者とは恐ろしい仕事やな」としみじみ話されたことがある。

蜂ケ岡中学校サッカー部は毎日が球拾い。アホらしくて退部しようとしたら1年秋の市の大会で、足の速さを買われて先発で使われた。布陣が攻撃はW、守備はMの文字に似ているためWMと呼ばれるシステムのライトインナー（右MF）で。上級生のユニホームを着たら背番号「8」の下の丸が隠れて「0」にしか見えない。顧問の大久保忠先生や先輩に大笑いされた。

中学2年の終わりごろから風呂の中で足を振るようになった。膝から下のスイングを速くするためだ。身長が伸びないのを悩んでいると父がかしわ（鶏）のスープをつくって飲ませてくれた。効果があったのか。2年の終わりから3年にかけて18㌢も身長が伸びた。山城高校に進んだ一年上の二村昭雄先輩が中学に遊びに来た時、私が誰か分からないくらいだった。

（日本サッカー協会顧問）

掲載日　2016年2月3日　日本経済新聞 朝刊　36ページ
©日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。